

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	家族療法家の関わりにより、介護放棄を食い止め、夫婦の希望に沿った支援をした事例
演者名	○岡 聡 若林英樹 市橋亮一
所属	○岡 聡 (きたおわり在宅支援クリニック 家族支援相談員) 若林英樹 (三重大学大学院医学系研究科 地域医療学講座講師) 市橋亮一 (医療法人かがやき総合在宅医療クリニック 代表)

目的

在宅医療を導入するにあたって、对患者への医療、福祉サービスの充実は図られてきている。一方で、患者を介護する家族が安心して自分らしく生活していくことを実現するためのサービスやサポート体制の構築は十分とは言えない。介護家族を取り巻くこのような環境は、介護放棄や疲弊などの問題が生じるリスクが高まる可能性をはらんでいる。本事例研究では、家族療法家が介護家族支援に介入した一例を報告する。

実践内容

患者は 80 歳女性、肝硬変、糖尿病、軽度の認知症があり、高血糖のため入院。軽快退院となったが、ADL は低下した。家に帰りたい希望が強く、夫の介護で在宅療養することとなった。夫は高齢であり、慣れない家事など家庭内役割の変化への戸惑いや苛立ちから、妻とのコミュニケーション問題を発端として夫婦不和になり介護放棄に至った。介護の質が患者の健康状態に直結する緊急を要する状況であった。看護師やケアマネジャーなど多職種と連携しながら、家族療法理論に基づいたアプローチを実施し、夫婦間のコミュニケーションの機能不全の改善と、主介護者である夫の感情面へ焦点をあてたサポートを導入した。

実践効果

夫婦間のストレスのみならず不慣れな家事でのストレスなど複合的な原因探究やその解決に至る道筋を迅速かつ効果的に介入し、機能的な夫婦関係を構築させ質の高い介護生活になるに至った。

考察

夫婦の関係性に起因し介護生活が困難となった事例に対して、家族療法家が多職種と連携しながら介入することによって支援できた一例を経験した。在宅医療の現場では、家族療法家が果たす専門性の役割は大きい。しかし、文化の異なる医療福祉専門職とどのように連携し、どのように提供していくか工夫が必要であろう。